

仙石山仏教学論集  
第6号（平成23年）

Sengokuyama Journal  
of Buddhist Studies  
Vol. VI, 2011

敦煌寫本『御註金剛般若經宣演』の科段文獻  
及びその作者

定源（王 招國）

# 敦煌寫本『御註金剛般若經宣演』の科段文獻及びその作者

定源（王 招國）

## はじめに

『御註金剛般若經宣演』（以下『宣演』）は、唐の開元年間に活躍した學僧道氤（668～740）の著作である。このテキストは現在、敦煌寫本（十七點）、トルファン出土の斷簡（三十點）及び『趙城金藏』の零本（一點）で傳存している。筆者はすでにこれらの資料を集約して『宣演』三卷本の復元作業を試みた<sup>1</sup>。『宣演』成立以降、そのテキストの流傳に伴って、幾つかの註釋文獻が現われるに至った。敦煌寫本の寶達撰『金剛暎』はその一つにあたる<sup>2</sup>。また高麗義天『新編諸宗教藏總錄』（以下『義天錄』）により遼代の唯識學僧である詮明述『宣演科』二卷と『宣演會古通今鈔』六卷<sup>3</sup>が知られているが、この二書の現存は未だ確認されていない。

なお、去る2009年9月、筆者はイギリス大英圖書館において敦煌寫本を調査した際に、『宣演』に関連する三つの斷簡を發見し、さらにそれが本来同一卷の寫本で後に斷裂したものであることを明らかにした。また寫本の内容と形態からみて、『宣演』の科段文獻であると推定されるため、この寫本は詮明述『宣演科』のテキストである可能性が浮上した。

本稿では、今回新出した『宣演』の科段文獻とみられる斷簡を紹介し、その内容及び『金剛暎』との關係を考察した上で、その作者について説明可否か若干の検討を加えることにする。

---

1 拙稿「敦煌本『御註金剛般若經宣演』の復元について」（『印度學佛教學研究』第59卷第2號、平成23年3月、p. 32-35）參照。

2 村山龍平氏の舊藏本、『大正藏』第85卷にそれを底本とした録文（No. 2734）がある。

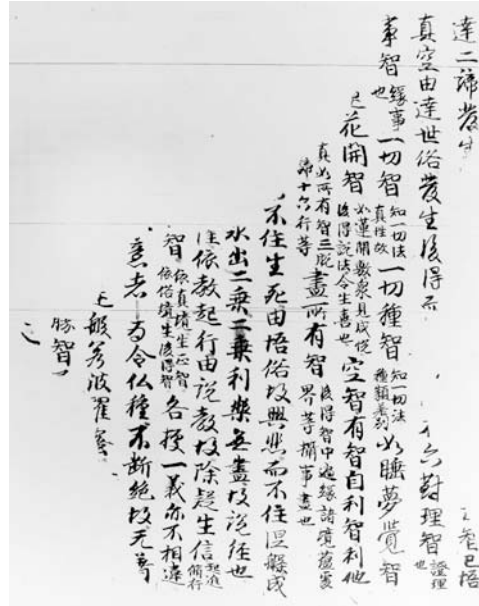
3 『大正藏』卷55、p. 1170c。

## 一、斷簡の書誌情報と残存内容

敦煌寫本のうち、今回の調査で発見した『宣演』に関連する三つの斷簡はスタイン本 8044 號、8166 號、9723 號である。これらの斷簡圖版はいずれも黄永武主編『敦煌寶藏』に収録されておらず、これまで容易に目にすることができなかった。以下、各斷簡の圖版を掲載した上で録文し、また基本的な書誌情報を提示することにする。なお、録文にあたって、各種の記號は次の凡例に従った。

- (1) 各行冒頭の數字は各斷簡の行數を示す。
- (2) □は、一文字の判讀不能箇所であり、…は、二字以上の缺字がある箇所を示す。
- (3) □の上にある文字は『宣演』の原文によって推測した。
- (4) ( ) 内の小文字は割註の内容である。
- (5) 文中にある異體字、通用字などをすべて正字（繁體）に變換した。
- (6) 斷簡には朱筆で書いた科段の線があり、録文ではこれらの朱線を表示できなかった。文中の一文字ほどの餘白は原文を忠實に寫した。

（一）スタイン 8044 號



【録文】

- 01 達二諦發生…智已悟
- 02 真空由達世俗發生後得而□…□有六對理智（證理也）
- 03 事智（緣事也）一切智（知一切法真性故）一切種智（知一切法種類差別如睡夢覺智）
- 04 …□花開智（如蓮開敷衆見咸悅後得說法令生喜也）空智有智自利智利他
- 05 …（真如所有智三脫□諦十六行等）盡所有智（後得智中遍緣諸境蘊處界等攝事盡也）
- 06 …□不住生死由悟俗故興悲而不住涅槃成
- 07 …永出二乘二乘<sup>4</sup>利樂無盡故說經也
- 08 …□依教起行由說教故除疑生信（起進修行）

<sup>4</sup> 「二乘」の二字は、寫本では朱筆の削除符がある。

4 敦煌寫本『御註金剛般若經宣演』の科段文獻及びその作者（定源）

- 09 …智（依真境生正智依俗境生後得智）各據一義亦不相違  
 10 …意者 為令佛種不斷絕故無著  
 11 …□般若波羅蜜…  
 12 …勝智…  
 13 …□…

本文書は、黄紙、縦 28.5 cm、横 20.5 cm、行書體で抄寫され、淡墨の罫線、上下線が引かれている。二紙からなる卷子本で、十三行が現存する。行の字數について完全に存するのは第三行のみである。最後の一行目は字痕を残すが、判讀不能である。第十行目と第十一行目の間に紙の継ぎ目がある。文中には小字の割註、朱筆の句讀點及び削除・科段符などが見られる。

(二) スタイン 8166 號



【録文】

- 01 （證真理也）如蓮…  
 02 智如所有智（四）…  
 03 由證真故生智而…

- 04 無住處涅槃資糧□…
- 05 □總料簡 無著苦□…
- 06 功德施論依境生…
- 07 參詳經論有六意 一…
- 08 菩薩總結六因云即□…
- 09 若翻六因疑不信等□…
- 10 永斷由說經故除疑生信□法不退當成正覺故云不斷
- 11 二意者 即向功德施論說欲令證悟真俗二諦者是
- 12 □□三者 初教深者 佛說般若波羅蜜即非般若
- 13 □悟教理之深微復二 波羅蜜一切諸佛從此經生我
- 14 從昔來所得慧眼未曾得聞如是之經等令知教
- 15 深其福勝大由斯廣讚持說功德勝以無量身財布施
- 16 後理妙者 顯真如無相法身究竟之理雖說真理
- 17 不壞俗諦廣百論云然佛所說無不甚深二諦法門
- 18 最為難測唯識論云撥無二諦是惡取空諸佛說
- 19 為不可治者由此有云般若經說一切空者非盡理也
- 20 二起斷修之妙行有二 初所斷者 欲入佛法以信為先猶豫
- 21 懷疑障生淨信最初入法論說斷疑理實此經兼斷除
- 22 障々有二種一煩惱障百二十八煩惱及彼等流為體執遍
- 23 計實我我身見為首障者覆義礙義能障涅槃名煩
- 24 □障 二所知障多少如煩惱障執遍計實法身見為首
- 25 能障菩提名所知障尋其根源二執為本以邪慧為二
- 26 執體此經正除我法二執根本既盡支末隨亡如經□
- 27 有我人衆生壽者相即非菩薩等是除□…
- 28 亦無非法相是除法執
- 29 三障者 一煩惱障二業障三報障亦名三雜…
- 30 往昔節々支解時若有我相人相衆生…
- 31 嗔恨等除煩□…
- 32 □滅等除□…

本文書は、黄紙、縦 28.5 cm、横 52.5 cm、行書體で抄寫され、淡墨の罫線、上下線が引かれている。三十二行が現存するが、首尾の行の後端部分が欠けている。第一行目の冒頭「證真理也」四字、第二行目の「四」字のみに小字の割註がみられる。第六行目と第七行目、また第三十行目と第三十一行目との間には紙の継ぎ目がある。中間一紙の文字を見て、一紙二十四行であるとわかった。全文にわたり朱筆の句讀點を施すとともに、最も注目すべきなのは、朱筆で引かれた科段の線と見られることである。第一行目から第十行目までの前端には三本の横の朱線、第十一行目から第十九行目までの前端には四本の横の朱線、第二十行目から最後の行までの上部には六本の横の朱線が見られる。第十一行目と第二十行目の冒頭にある「二」字、また第二十九行の第四文字目である「三」字は、他の文字より一文字分の高くて書かれてある。こうした寫本の形態からみると、一種の科段文獻であると容易に推測することができる。

### （三）スタイン 9723 號



#### 【録文】

- 01 …□生信□…  
 02 …□歡喜故法久住  
 03 …□諦一者俗諦謂諸凡

- 04 …□智境界果等  
 05 …□說第一義非智之所行何  
 06 …□意謂令衆生不處沉輪識  
 07 …□脱由觀勝義而生□…  
 08 …□知縁起略□…

本文書は、黄紙、縦 13.7 cm、横 13.8 cm、行書で抄寫されている。八行が現存し、各行の前端はすべて欠損している。淡墨の罫線や下線が見られ、朱筆の句讀點を施してある。

以上、三つの斷簡は紙質・字體などの形態が完全に一致しており、各斷簡の現存箇所を見て、内容的にも接合することができると判明した。つまり、三つの斷簡は本來同一の寫本で、後に分裂したものに違いない。以下ではこれらの接合内容を示しておこう。

## 二、斷簡の綴合状況

前掲したスタイン本の 9723 號+8044 號+8166 號の順に並べると、前後の内容は直接繋がっていることがわかった。ここではその綴合状況を明示するため、次のような各種の記號を使った。

- (1) 各行冒頭の數字は綴合後の行數を示す。
- (2) 文中の句讀點を参照しながら、私なりに斷句を施した。
- (3) 紙の繼ぎ目のところは\_\_\_\_\_で示す。
- (4) \_\_\_\_\_はスタイン 9723 號（第 1 行～第 8 行）
- (5) \_\_\_\_\_はスタイン 8044 號（第 7 行～第 18 行）
- (6) ~~~~~はスタイン 8166 號（第 10 行～第 41 行）

- 01 …生信□…  
 02 …歡喜故、法久住  
 03 …諦、一者俗諦、謂諸凡  
 04 …□智・境・業・果等



- 05 …□說第一義、非智之所行、何
- 06 …意、謂令衆生、不處沉輪。識
- 07 達二諦、發生…脱、由觀勝義、而生正智、已悟
- 08 真空、由達世俗、發生後得、而知緣起、略有六對、理智（證理也）・
- 09 事智（緣事也）、一切智（知一切法真性故）・一切種智（知一切法種類差  
別）、如睡夢覺智
- 10 （證真理也）・如蓮花開智（如蓮開敷衆見咸悅後得說法令生喜也）、空智・  
有智、自利智・利他
- 11 智、如所有智（真如所有智三脱四諦十六行等）・盡所有智（後得智中遍  
緣諸境蘊處界等攝事盡也）。
- 12 由證真故、生智而不住生死。由悟俗故、興悲而不住涅槃。成
- 13 無住處涅槃資糧、永出二乘、利樂無盡、故說經也。
- 14 □<sup>次</sup>總料簡、無著菩薩、依教起行、由說教故、除疑生信（起進修行）。
- 15 功德施論、依境生智（依真境生正智依俗境生後得智）、各據一義、亦不  
相違。
- 
- 16 參詳經論有六意、一意者、為令佛種不斷絕故。無著
- 17 菩薩、總結六因云、即是般若波羅蜜…
- 18 若翻六因、疑不信等。勝智…
- 19 永斷、由說經故、除疑生信。入法不退、當成正覺、故云不斷。
- 20 二意者、即向功德施論說、欲令證悟、真俗二諦者是。
- 21 □□<sup>簡(為)</sup>三者、初教深者、佛說般若波羅蜜、即非般若
- 22 一悟教理之深微復二、波羅蜜一切諸佛從此經生、我
- 23 從昔來所得慧眼、未曾得聞如是之經等。令知教
- 24 深、其福勝大、由斯廣讚持說功德、勝以無量身財布施。
- 25 後理妙者、顯真如無相法身究竟之理、雖說真理
- 26 不壞俗諦。廣百論云、然佛所說、無不甚深、二諦法門、
- 27 最為難測。唯識論云、撥無二諦、是惡取空、諸佛說
- 28 為不可治者、由此有云、般若經說一切空者、非盡理也。
- 29 二起斷修之妙行有二、初所斷者、欲入佛法、以信為先、猶豫

- 30 懷疑、障生淨信。最初入法論說、斷疑理實。此經兼斷除  
 31 障、々有二種、一煩惱障、百二十八煩惱及彼等流為體、執遍  
 32 計實、我身見為首。障者、覆義・礙義、能障涅槃名煩  
 33 <sup>(備)</sup>□障。二所知障、多少如煩惱障、執遍計實、法身見為首。  
 34 能障菩提名所知障。尋其根源、二執為本。以邪慧為二  
 35 執體、此經正除我・法二執。根本既盡、支末隨亡。如經、□  
 36 有我・人・衆生・壽者相、即非菩薩等、是除□…  
 37 亦無非法相、是除法執。  
 38 三障者、一煩惱障、二業障、三報障、亦名三雜…  
 39 往昔節々支解時、若有我相・人相・衆生…
- 
- 40 瞋恨等、除煩惱…  
 41 □滅等、除□…

以上のような綴合状況から判断すると、各斷簡の破損状態が極めて激しいことがわかる。綴合した内容（以下「復元本」）は合わせて四十一行が現存している。そのうち、第十五行と第十六行、そして第三十九行と第四十行の間に紙の継ぎ目があり、都合三紙からなる卷子本である。筆者から囲み線を付した「正」「有」「蓮」「而」「薩」「是」「勝」「入」の八字は、綴合によって判讀可能となった箇所である。これらは三つの斷簡がもともと同一の寫本であることを裏付ける一つの證左にもなる。

### 三、復元本の内容に関する検討

前掲した三つの斷簡を見て分かるように、これらはすべてスタイン 6980 號以降の番號に編入され、『敦煌遺書總目録索引新編』などの目録に著録されていない寫本である。スタイン 6980 號以降の寫本に関する調査・著録について、2000 年に出版された方廣鋤編『英國圖書館藏敦煌遺書目録』を参照するのが有益である。なお、この目録はスタイン本の 6981 號から 8400 號までの寫本を著録對照としたものであるため、前掲した三つの斷簡のうちスタイン 9723 號が含まれていない。方氏の目録では、

まずスタイン 8044 號に對して「夾註御註金剛般若波羅蜜經宣演」と擬題し、また同本の書誌情報や内容の録文を記入した上で、次のように説明している。

本文獻未為歷代大藏經所收、係對道貳的《御註金剛般若波羅蜜經宣演》的註釋、註釋的部分用夾註形式出現、故名。所註《御註金剛般若波羅蜜經宣演》部分、殘文根據《大正藏》本補足、可參見《大正藏》第 85 卷第 9 頁下欄第 19 行至第 10 頁上欄第 6 行<sup>5</sup>。

スタイン 8044 號（復元本の 8 行から 15 行まで）の現存文面において確かに割註の箇所が多く見られる。單にスタイン 8044 號の註釋形式や内容から判斷すれば、「夾註御註金剛般若波羅蜜經宣演」と擬題したのはもっとも理に合うのである。次にスタイン 8166 號の著録に關して、方氏の目録では「御註金剛般若波羅蜜經宣演卷上」<sup>6</sup>と同定したとともに、「與大正藏本相比、文字略有參差」（大正藏本に比べ、文字にやや參差あり）を提示した。上記の著録からみると、方氏は調査した時點で、スタイン 8044 號と 8166 號が本來同一卷の寫本であるのに氣付かなかつたようである。實は、前掲したように、スタイン 9723 號を含め三つの斷簡はもともと同一卷の寫本である。復元本の内容からみれば、果たして『宣演』の註釋書であるかどうか検討の餘地があるが、『宣演』テキストそのものとは到底考えられない。というのは、復元本の内容と『宣演』の原文との間に同文のところがある一方で、相違する箇所を有するからである。兩者の出入は少なくとも次のように要約することができる。

---

<sup>5</sup> 方廣錫編『英國圖書館藏敦煌遺書目録（斯 6981 號～斯 8400 號）』、宗教文化出版社、2000 年 6 月、p. 292。

<sup>6</sup> 同上 p. 328。

（一）『宣演』より省略（表中の括弧内にある數字は復元本の行數を示す）

	復元本	『宣演』
①	一者俗諦、謂諸凡（3行）	一者俗諦、 <u>二者真諦</u> 。俗諦者、謂諸凡夫。
②	除疑生信、入法不退、當成正覺、故云不斷（19行）。	除疑生信、入法不退、 <u>歡喜弘通</u> 、當成正覺、故云 <u>佛種</u> 不斷。
③	一切諸佛從此經生、我從昔來所得慧眼、未曾得聞如是之經等（22～23行）。	一切諸佛從此經生。 <u>須菩提</u> 、深解義趣、涕淚悲泣。我從昔來所得惠眼、未曾得聞如是之經。 <u>無著論</u> 云、令大乘教、久住於世。

右の欄で下線を施した箇所はすべて復元本で確認できない。こうした例を見ると、復元本のほうがやや簡潔な表現となっており、『宣演』より略抄したように見える。特に復元本の第③例の末にある「等」字を用いて、意圖的に省略したかもしれない。しかし、復元本では『宣演』より略抄されているばかりではなく、増廣の例も見出せる。

（二）『宣演』より増廣

復元本が『宣演』より増廣している部分については、割註箇所のすべてがそれにあたるが、それ以外に本文にもみられる。割註の箇所に關する検討は次項に譲り、ここではまず本文に見られる二つの増廣例を舉げてみる。

	復元本	『宣演』
①	二意者、即向 <u>功德施論說</u> 、 <u>欲令證悟</u> 、 <u>真俗二諦者</u> 是（20行）。	二意者、即向論說二諦者。
②	障有二種、 <u>一煩惱障</u> 、 <u>百二十八煩惱及彼等流為體</u> 、 <u>執遍計實</u> 、 <u>我身見為首</u> 。障者、 <u>覆義・礙義</u> 、	障有二種、煩惱・所知。尋其根源、二執為本、此經正除我・法二執。

<p>能障涅槃名煩<sup>(惱)</sup>障。二所知障、  <u>多少如煩惱障、執遍計實、法身</u>  <u>見為首。能障菩提名所知障。尋</u>  <u>其根源、二執為本。以邪慧為二</u>  <u>執體、此經正除我・法二執</u> (31  ~35 行)。</p>	
---	--

左の欄にある下線の箇所は、『宣演』の原文には見當らない。第①例にある「向」の文字は「さき」を意味する。『宣演』にいう「向論」とは、復元本の内容により『功德施論』（功德施菩薩造『金剛般若波羅蜜經破取著不壞假名論』）を指すのがわかるが、復元本の「欲令證悟真俗」の六字は『宣演』にはまったく見られない。第②例の復元本では『宣演』より増廣した文字が極めて多い。その増廣箇所はすべて「煩惱障」と「所知障」を解釋したものにあたる。これとほぼ同じ内容は、後掲するように、『宣演』の註釋書である『金剛映』にも見られる。つまり、復元本には單なる『宣演』からの抜粹だけではなく、そこから敷衍した内容もある。

### （三）表現上の相違

	復元本	『宣演』
①	謂令衆生、不處沉輪（6行）。	衆生不識二諦、常處沉淪。
②	各據一義、亦不相違。參詳經論有六意（15~16行）。	各據一義、亦不相違。然總參詳經之與論、起一至六。

以上の二例は文の表現において多少異なっている。第①例では『宣演』は「衆生は二諦（真・俗）を知らないので、常に沉淪に處する」と表現するのに対して、復元本は「沉淪（沉輪）<sup>7</sup>に處しないため、[二諦を知らなけ

<sup>7</sup>「沉輪」と「沉淪」は音通で混用する。例えば、敦煌寫本ではスタイン 1497 號の「樂入山讚」にある「來生得免苦沉輪」の句は、同讚別本であるスタイン 5966 號とペリオ 2563 號では「來生得免苦沉淪」となっている。

ればならない]」と強調している。第②例は「經論」と「經之輿論」、「有六意」と「起一至六」との相異であるが、文意上において大差がない。現在のところ、復元本の内容は僅少なので、全容の解明に限界がある。以上のような『宣演』との對照を見る限り、復元本は『宣演』のテキストではないが、兩者の間に密接な關連があることは否定できない。このような兩者の緊密な關係を考慮した上で、復元本が具體的にいかなる文獻であるか検討する必要がある。この問題を解明する一つの手かがりとして、スタイン 8166 號にみられる多數の朱線に注目すべきである。

復元本においてスタイン 8166 號の現存内容は第 10 行から最後の第 41 行までである。各行の前端にみられる朱線の詳細は既述した通りである。まず文中に引かれた朱線からみると、復元本の第 21 行目の冒頭にある「<sup>(開)</sup>□□三者」とは第 22 行の「<sup>(二)</sup>□悟教理之深微」と第 29 行の「二起斷修之妙行」はそれにあたるが、第三の内容が欠損している。この欠損した内容は『宣演』の原文によって「(三) 為識果德之真化」にあたると推測できる。また「<sup>(二)</sup>□悟教理之深微復二」というように、第一からさらに「初教深者」(第 21 行)と「後理妙者」(第 25 行)に分けている。このうち斷簡の朱線によって示された讀む順序に注意すべきである。即ち第 21 行目の最後の「若」字の次に第 22 行目の中間にある「波」字と繋げることになる。「初教深者」からの讀む順序を示せば、次の通りである。

初教深者、佛說般若波羅蜜、即非般若波羅蜜、一切諸佛從此經生。我從昔來所得惠眼、未曾得聞如是之經等。令知教深、其福勝大。由斯廣讚持說功德、勝以無量身財布施。

さらに第 29 行の「二起斷修之妙行有二」から見て、同様に二つの項目に分けて解釋されているが、復元本では僅か「初所斷」の箇所が現存するのみである。ここにいう「所斷」とする對象は言うまでもなく「障」である。この「障」に對して、復元本では二種を分類している。即ち「煩惱障」と「所知障」という二障と「煩惱障」・「業障」・「報障」という三障(三雜)を掲げている。實は、以上のような分類と呼稱に全く一致する内

容は『宣演』にも見られる。以下、『宣演』の原文を参照しつつ、復元本の第21行にみられる「<sup>(開)(為)</sup>□□三者」の科段を示してみよう。

- |             |   |                                 |
|-------------|---|---------------------------------|
| (一) 爲悟教理之深微 | { | (1) 初教深                         |
|             | { | (2) 後理妙                         |
| (二) 爲起斷修之妙行 | { | (1) 初所斷 (A 煩惱障・所知障。B 煩惱障・業障・報障) |
|             | { | (2) 後所修 (欠損)                    |
- (三) 爲識果德之真化 (欠損)

上記の科段によると、復元本の第41行直後の欠損内容は「後所修」と「爲識果德之真化」にあたる箇所である。復元本の前後内容がともに欠損しているが、現存する箇所は『宣演』の「五門分別」第一門の冒頭部分を科釋したものに当たる内容であると容易に推察される。内容的に『宣演』との密接な関連、特に現存する斷簡の形態によって、復元本は單に『宣演』の註釋書とは言い切れず、その科段文獻の一つと見てよからう。

#### 四、復元本と『金剛暎』との關係

復元本の内容を考察した上で看過できないのは『宣演』より増廣した箇所である。前項では本文の増廣箇所を取り上げ關説した。本項では既掲した「煩惱障」と「所知障」に關する増釋内容を含め、また残る割註の増廣部分を中心にして復元本と『宣演』の註釋書である『金剛暎』との關連を考察することにする。

『金剛暎』のテキストについて、村山龍平氏舊藏の敦煌寫本(T85、No. 2734)やペリオ4748號の「金剛暎序」を現存するほか、ロシア藏敦煌寫本から見られる同テキストの三つの斷簡<sup>8</sup>が確認できた。その中で内容的

<sup>8</sup> ロシアのサンクトペテルブルクの東方研究所に所藏される『金剛暎』と見られ

に復元本と對應するのは村山氏舊藏の敦煌寫本のみである。

復元本において『宣演』に見られない割註は合計で十箇所がある。そのうち、八箇所はすべて「六對」十二種智に関する解釋内容である。各の智を對應して挙げれば、以下のようになる。

- 1 理智（證理也）⇔事智（緣事也）
- 2 一切智（知一切法真性故）⇔一切種智（知一切法種類差別）
- 3 如睡夢覺智（證真理也）⇔如蓮花開智（如蓮開敷衆見咸悅後得說法令生喜也）
- 4 空智⇔有智
- 5 自利智⇔利他智
- 6 如所有智（真如所有智三脫四諦十六行等）⇔盡所有智（後得智中遍緣諸境蘊處界等攝事盡也）

以上、この「六對」十二種智のうち、復元本では僅か1・2・3・6の四對八種の智に割註を施すのみで、4・5の二對四種の智に割註が見られない。なお興味深いことに、復元本の割註にほぼ相應する内容が村山氏舊藏の敦煌寫本『金剛暎』にも見られる。その相應箇所を挙げれば、次のようになる。

略有六對者、則真俗二智有六對差名也。

第一對、證理之智真、勝事之智俗。

第二對、知一切法真性故名一切智。知一切法差別相故名一切種智、則種類差別而知故、以種言而簡別也。

第三對從喻為名、如蓮花開敷、衆見咸悅。喻後得說法、令生喜也。

---

る斷簡はДx08553v 號・Дx07636 號・Дx08231v 號である。このうち、Дx08553v 號・Дx07636 號は同一寫本である。この三つの斷簡について、筆者の拙稿『唐代における「金剛般若經」註釋書の研究一道氣撰「御註金剛般若經宣演」を中心に』(平成22年度 國際佛教學大學院大學に提出する博士論文。未刊)の第二章の第二項「ロシア藏敦煌寫本の『金剛暎』に関する斷簡」參照。



如所有智者、真如所有智也。故對法論云、如所有者、三脱四諦十六行等也。

盡所有<sup>9</sup>者、謂後得智中遍緣諸境也。故對法論云、盡所有者、蘊處界等攝事盡故<sup>10</sup>。

上記にある下線を施した箇所は復元本の割註とほぼ對應できるものである。冒頭にある「略有六對」は『宣演』の原文であり、「真俗二智」のうち六對十二種の別名がある。第一對「事智」の解釋について、『金剛映』は「勝事」となるが、復元本は「縁事」となす。「勝事之智」とは文意上理解し難いので、「勝」は恐らく「縁」の行書體の形似による誤寫であろう<sup>11</sup>。第二對について「一切智」の解釋は両者が全く一致している。これに對して「一切種智（知一切法種類差別）」の割註は『金剛映』にある「知一切法差別相故名一切種智、則種類差別而知故」の文意を纏めたもので、両者が若干異なっている。第三對において復元本は「如睡夢覺智（證真理也）」という割註があるものの、相應する内容が『金剛映』には見當らない。また第四對と第五對の四種の智について、復元本は割註を施していないのに對して、『金剛映』は四種の智の名前さえも挙げていない。最後に第六對の「如所有智」と「盡所有智」について、『金剛映』は『對法論』を引用しながら解釋したが、復元本の割註は『金剛映』の内容を要約して書かれたものと見られる。

以上のように八箇所の割註内容と『金剛映』との異同を見てきたが、残る二箇所の割註はどうなるのか、さらに對照してみよう。

9 「有」字の後に「智」字を脱落したのであろう。

10 『大正藏』卷 85、p. 53b。

11 「縁事之智」という言葉は、窺基『成唯識論述記』卷 4 にある「後得智中、縁事之智亦名分別」（『大正藏』卷 43、p. 386b）を挙げることができる。逆に「勝事之智」の表現は管見に及ぶ限り、『金剛映』以外、今まで一例も見られない。

復元本	『金剛映』
無著菩薩、依教起行、由説教故、除疑生信（起進修行）。功德施論、依境生智（依真境生正智依俗境生後得智）（14～15行）。	依教起行者、由説教故、除疑生信等、即是起進修行也。依境生智者、境即二諦、由依二諦生真俗等。

復元本にある「無著菩薩、依教起行」は『宣演』の原文である。これに對して『金剛映』では後の一句を取り上げ「由説教故、除疑生信等、即是起進修行也」と解釋したが、復元本の割註箇所はこれと全く一致している。「依境生智」の次にある復元本の割註は『金剛映』とは異なっているものの、文意はさほど變わらない。即ち相異の境に依って智も異なるわけである。つまり真境（真諦）によって生じたものは「正智」であり、俗境（俗諦）によって生じたものは「後得智」である。要するに、真と俗に分けたのは二諦に依るものである。以上の例から、復元本は『金剛映』の文意を踏襲しながら割註を施した可能性が高いと考えられる。

さらに前掲した通り、復元本にある割註内容のほか、『宣演』より増廣した箇所は「煩惱障」と「所知障」を解釋したところである。この増廣内容を『金剛映』と對照すれば、次のようである。

復元本	『金剛映』
障有二種、一煩惱障、百二十八煩惱及彼等流為體、執遍計實我身見為首。障者、覆義・礙義、能障涅槃名煩惱障。二所知障、多少如煩惱障、執遍計實法身見為首、能障菩提名所知障。尋其根源、二執為本、以邪慧為二執體、此經正除我・法二執（31～35行）。	應知障有二種、煩惱・所知者。障者、覆義・礙義名之障。故成唯識論第九云、煩惱障者、謂執遍計所執實我薩迦耶見而為上首、百二十八根本煩惱、及彼等流、諸隨煩惱、此皆憂惱有情身心、能障涅槃名煩惱障。所知障者、謂執遍計所執實法薩迦耶見而為上首。見疑・無

	<p>明・愛・恚・慢等。覆所知境、無顛倒性、能障菩提名所知障。尋其根源、二執為本者。即上論文、遍計所執實我・法二見、及相應法邪慧為二執體性、此界與二障為本也。</p>
--	---

上記において下線を付した兩者の内容はほぼ對應することができる。『金剛暎』は「煩惱障」と「所知障」に對して『成唯識論』卷九の内容を引用して解釋したが、復元本はその出典を明示していない。つまり復元本の解釋は『成唯識論』から引用した根據が見出せない。實は『金剛暎』と比較して、復元本の表現はかなり簡略で、互いに語句の順番も若干異なっているが、文意としては大差がない。例えば、『金剛暎』にある「我薩迦耶見而為上首」と「法薩迦耶見而為上首」に對して、復元本ではそれぞれ「我身見為首」と「法身見為首」となり、「薩迦耶」(sat-kāya)を「身」に意譯したのである。

以上の考察を通じて、『宣演』より増廣した復元本の内容はすべて『金剛暎』に密着なかわりがあったことが確認できた。兩者の相似點において復元本から『金剛暎』への影響が殆ど見えず、復元本は『金剛暎』を下敷きしながら解釋したのではあるまいかと思われる。こうした推論に大過がなければ、復元本の成立を考察する上で『金剛暎』の存在を前提としていた可能性を無視することができない。

『金剛暎』は長安の清發道場沙門寶達（生卒不詳）の著である。當該書は『宣演』（736～740年成立）の註釋書であることと、またその書名が最も早く『智證大師請來目錄』（859年成立）に登場したことから、その成書年代については開元末（741頃）から大中十三年（859）まで約百十餘年の間に限定される。前述の推論に基づき、復元本の成立を『金剛暎』の成書以降であると考え、そこから『宣演』→『金剛暎』→復元本という前後關係が浮かび上がってくる。『金剛暎』の著者寶達については、詳細な傳歴は不明であるが、その著の内容からみれば、『宣演』の著者道氤と同じ唯識の學僧であると推定できる。復元本は僅か一部分が残っているが、現存

の内容を見る限り、その作者もやはり唯識學の關係者であると想像するに難くない。そうであるならば、『金剛暎』成立以降の人物、しかも唯識學者とみられる復元本の著者はいったいだれであろうか。この問題について次項に移って若干の検討を加えることにする。

## 五、復元本の作者について

復元本の作者を検討するに先立って、最初に目録書から『宣演』の科段文獻に關する記録を確認する必要がある。歴代目録資料の中に『宣演科』という書名で著録されたものは『義天録』にしか見出せない。即ち當該書卷一の『金剛般若經』註釋書の項に次のような記述がある。

宣演六卷 道貳述

宣演科二卷

宣演會古通今鈔六卷 已上 詮明述<sup>12</sup>

上記三書のうち、後二者は書名の通り『宣演』の科段と註釋である。二書合わせて八卷、ともに詮明の撰述という。詮明とは遼の唯識學僧、燕臺憫忠寺（現在北京法源寺）の沙門であり、『契丹藏』の編集者としてもよく知られている。彼の生卒年について今なお不明であるが、先行の研究ではおよそ五代の後唐天成年間（926～930）から遼の聖宗の統和末頃（1021）にかけて生存した人物と認識されている<sup>13</sup>。ここでは本稿の主題に關連して、

<sup>12</sup>『大正藏』卷 55、p. 1170c。

<sup>13</sup> 詮明に關する研究については、張暢耕・畢素娟「論遼朝大藏經的雕印」（『中國歷史博物館館刊』總第 9 期、1986 年 9 月、p. 69-89）と竺沙雅章著『宋元佛教文化史研究』（汲古書院、2001 年）などの論著で触れられたことがある。

ちなみに、詮明傳の資料に關して、近年、韓國松廣寺より發見された『妙法蓮華經玄贊會古通今新抄』卷一冒頭の劉晟撰の序文にみられる詮明傳の記録に注目すべきである。その序文によれば、かつて秋官正郷參知政事をつとめた河間（現在河北省滄洲）の刑公という人物が詮明のため「本事碑」を撰述したという（西脇常記『中國古典社會における佛教の諸相』第 III 部—4「出口コレクションの一斷片によせて」の文末の附録 劉晟撰「妙法蓮華經玄贊會古通今新抄序」參照（知泉書館、

前掲した註明の二書を含め『義天録』による註明著作のリストを挙げてみたい。

- 1 『宣演科』二卷
- 2 『宣演會古通今鈔』六卷
- 3 妙法蓮華經玄贊會古通今新抄十卷
- 4 妙法蓮華經玄贊會古通今新抄科四卷
- 5 妙法蓮華經玄贊會古通今新抄大科一卷
- 6 金剛般若經消經鈔二卷
- 7 金剛般若經消經鈔科一卷
- 8 彌勒上生經疏會古通今新抄四卷
- 9 彌勒上生經疏會古通今新抄科一卷
- 10 彌勒上生經疏會古通今新抄大科一卷
- 11 成唯識論詳鏡幽微應新鈔十七卷
- 12 成唯識論述記應新抄科文四卷
- 13 成唯識論述記應新抄大科一卷
- 14 百法明門論金臺義府十五卷
- 15 百法明門論金臺義府科二卷
- 16 百法明門論金臺義府大科一卷
- 17 續開元釋教録三卷 詮曉集（舊名註明）

上記のリストでは註明の著作として合計で十七種、七十五巻にのぼることになる。完本とは限らないが、上記のうち少なくとも第3（巻一〈韓國松廣寺本〉・巻二〈韓國松廣寺本と應縣佛宮寺本〉・巻六〈應縣佛宮寺本〉）、第4（巻二〈ペリオ 2159v 號〉）、第8（巻二〈廣勝寺本〉）第9（全巻〈廣勝寺本〉など<sup>14</sup>、

---

2009年10月、p. 127）。この「本事碑」は現存していないが、劉晟撰の序文にはかなり引用があるため、貴重な資料といえる。この資料による註明傳の検討は別の機會に譲りたい。

<sup>14</sup> 近年、西脇常記の研究により、ベルリン・トルファン・コレクションには註明の「彌勒上生經科一卷」の刻本斷片が存在することが紹介されている。CH1054と

第12（卷三〈應縣佛宮寺本<sup>15)</sup>）など五種の書、合計で八巻が現存していることが確認できる。説明著作のリストからみれば、上記第3の「妙法蓮華經玄贊會古通今新抄」、第8の「彌勒上生經會古通今新抄」、第12の「成唯識論述記應新抄科文」、第14の「百法明門論金臺義府」等は、いずれも窺基（632～682）の著作を祖述したものとわかる。また注目すべきことに、説明の著作は科段文獻が多く占め、一つの註釋書を往往にして「…科」と「…大科」という二つの科段文獻を分けている。『宣演』に對して説明は『宣演會古通今鈔』六巻を著したと同時に、『宣演科』二巻をも撰述した。

現在、説明述『宣演會古通今鈔』と『宣演科』は『義天録』に著録されているが、残念ながらいずれも原本の所在が確認されていない。こうした現況の下に本稿の検討対象となる復元本が説明の著述である『宣演科』そのものか否かが當面の課題となる。

まず、復元本は何時頃書寫されたのか、奥書などの書寫年代を確定する手掛かりがないため不明である。寫本の紙質・形態及び書寫の字體からみれば、九十一世紀の寫本であると推測できる。前述したように、復元本は『金剛暎』と密接な關連を結び、それを参照した上で成立したのではあるまいかと考えられる。そのため、復元本の撰述年次として早くても九世紀の後半以降となり、説明の生存年代からみれば、復元本が彼の著作である可能性が存する。

ところで、説明述『宣演科』の存在があくまでも『義天録』によって知られたものだけで、その現本所在を確認できない以上、『義天録』の著録が信頼に足りるかどうかが、些かの疑問を残すかもしれない。説明は窺基の著作を中心に数多くの唯識關係書を解釋したので、同じ唯識學の註釋書といへば『宣演』を取り上げ復註したとしても不思議はないだろう。實際に現存する説明著作のうち、廣勝寺本『上生經疏會古通今新抄』卷二に『宣演』から一箇所の引用を見出すことができる。即ち、

CH1615 がそれである（西脇の前掲書・第III部「中央アジア出土の漢語文獻」の第8の「唯識關係新史料」、知泉書館、2009年10月、p.204）。

<sup>15</sup> この刊本は『應縣木塔遼代秘藏』（文物出版社、1991年7月）に影印の圖版がある。

青龍疏云、有教有行有得有果證名為正法、有教有行而無果證名為像法。  
建立像似之法、滅没正法故。雖<sup>16</sup>有教在無行無證名為末法。佛初記別、  
正法一千年、像法一千年、末法一萬年。由度女人正法減半。然有兩説、  
 一云由度女人減五百歳。雖説八敬、不減正法。由彼不行、正法還滅。  
故經有説（即賢劫等經）及薩婆多等宗、皆唯<sup>17</sup>正法但五百年<sup>18</sup>。  
 一<sup>19</sup>云正法一千年、若<sup>20</sup>説八敬、全無行者、正法欲滅<sup>21</sup>。既有行者、正  
法依定。大衆部等、皆作此説<sup>22</sup>。

上記の冒頭にある「青龍疏」とは『宣演』を指し、その書名は『宣演』  
 の撰述地である長安の青龍寺に由來するものである<sup>23</sup>。上掲の下線を付し  
 た箇所は、『宣演』巻中にある經文の「如來滅後、後五百歳」を解釋する  
 内容にあたる。『宣演』の原文と比較して、兩者の相違箇所を脚註で示し  
 たが、ほぼ原文の通りに引用していた。ただ下線を付していない「建立像  
 似之法、滅没正法故」と割註の「即賢劫等經」の二箇所は『宣演』には見  
 られない。後者の割註は説明によって施された可能性がある。前者の箇所  
 は説明による註であるのか、それとも『宣演』の欠落した内容であるのか、  
 詳細は不明である。いずれにせよ、説明の著作に現れる『宣演』の引用を  
 通じて、『宣演』のテキストが遼土に傳播したとともに、説明が註釋を加

<sup>16</sup>「雖」＝「唯」。

<sup>17</sup>「唯」＝「為」。

<sup>18</sup>「年」＝「年若依此論。後五百歳。即當第三五百年中像法後分。而言正法將滅時  
 者。是行正法欲滅之時。非證正法。釋三後云。言後時者。初五百歳。後分者。第二  
 五百。後五百歳者。第三五百」。

<sup>19</sup>「一」＝「二」。

<sup>20</sup>「若」＝「若不」。

<sup>21</sup>「滅」＝「滅」。

<sup>22</sup>『宋藏遺珍』卷6、p. 4181b。

<sup>23</sup>後世の文獻において「青龍疏」あるいは「青龍」の名で『宣演』を引用したの  
 はしばしば見られる。例えば、宋太宗『御制秘藏詮』卷十四に「青龍疏云、理深功  
 妙福難思」、子璿『金剛經纂要刊定記』卷二に「青龍云、密多者、離義、到義」  
 （『卍續藏經』卷33、p. 184b）などがある。

えたことを事実として認めるべきである。

さらに、説明撰の科段文獻が敦煌寫本において現存することが確認できる。ペリオ 2159v 號<sup>24</sup>に見られる「燕臺憫忠寺沙門 説明 科定」という撰號を持つ「妙法蓮華經玄贊科文卷第二」がそれである。敦煌寫本に彼の著作が現存する事実によって、同じ敦煌寫本である復元本が説明「宣演科」のテキストである可能性が一層高くなるのである。ただ、もし復元本を説明撰とするならば、説明の著作、特に説明の他の科段文獻とはどのような親近性を持つのか、あるいは同類の書として共通する性格を有したかどうか確認する必要がある。

現存する説明の科段文獻としてこれまで確認できたのはペリオ 2159v 號を含め、廣勝寺本の「彌勒上生經科一卷」や「成唯識論應新鈔科文（卷三のみ）」等の三種のみである。これらのテキストは寫本であれ、刊本であれ、内容や形式において共通する点が見られる。即ち註釋書の内容を科段する際に、數字の表示として二つの場合は「初」「二」、あるいは「初」「後」となる。それ以上の場合は「初」「二」「三」「四」「五」…という通番を採用し、數字の下に科段の内容を記載している。また、現存する説明撰の科段文獻を見る限り、もう一つの共通点がある。即ち彼の科段文獻ではただ科段を列挙するのみで、割註のような註釋的な文句が殆ど見られない。要するに、文獻の形態上において、復元本と説明の科段文獻とはさほど大差はないが、内容上は兩者の間でかなり異なっている。言い換えれば、割註を含め註釋書的な性格を持つ復元本は現存する説明の科段文獻とは類似する一面が見當らず、説明の著作として認め難いところもある。

なお、前に注意したように、説明の著作では同一の文獻に對しても、「…科」と「…大科」という二種類の書があり、彼の著作中に性格の異なる科段文獻が存在したかもしれない。復元本は『義天錄』に伝えられる説明述「宣演科」のテキストかどうか、俄かに斷定できないが、否定する有

<sup>24</sup> ペリオ 2159 號はその正面は「西京崇聖寺沙門知恩集」という撰號をもつ「金剛般若經依天親菩薩論贊略釋秦本義記」である。その裏面は「妙法蓮華經玄贊科文」があるが、途中まで書き止め、その次に『華嚴經・入法界品』が書寫されている。



力な根據もない。

以上の検討を通じて、現段階では復元本はやはり唯識學僧である遼の證明の著と見て最も妥當ではないかと考えられる。

## おわりに

スタイン本における 6980 號以降の寫本は殆ど斷簡であり、それに關する研究があまりされていなかった。本稿で取り上げたスタイン本 8044 號、8166 號、9723 號はいずれも斷簡であるが、もともと同一卷の寫本であり、内容的にも直接綴合することができた。この寫本の形態と内容によって、道氤撰『宣演』の科段文獻であると推定した。また『宣演』に見られない増廣箇所注目しながら検討した結果、この寫本は『宣演』の註釋書である『金剛暎』と密接な關係を持ち、しかもそれを參照した上で成立したものであることが明らかになった。

『宣演』の科段文獻といえ、現在のところ『義天錄』によって説明述『宣演科』二卷という著録があるということしかわからず、テキストの所在は從來確認されていない。これに對して、本稿の検討對象となるスタイン本三つの斷簡は説明述『宣演科』のテキストではないかと提示した。こうした推論に誤りがなければ、今回新出したスタイン本は後世における『宣演』及び『金剛暎』の影響を探る上で極めて貴重な資料であるとともに、説明著作の研究にとって一つの新資料を提供するものとなるであろう。

## Summary

### The Dunhuang Manuscript Version of a Synopsis of the *Yu zhu jingang bore jing xuan yan* and Its Author

Dingyuan

The present paper investigates a synoptic text, surviving only in Dunhuang manuscript fragments (Stein Nos 8044, 8166, and 9723 — all part of the same scroll), dealing with the *Yu zhu jingang bore jing xuan yan* 御註金剛般若經宣演, the work of Daoyin 道飭 (668–740), a scholar-monk active during the Kaiyuan 開元 era. My examination of the content and form of the extant fragments leads me to conclude that this must be a synopsis compiled on the basis of the *Jingang ying*, a commentary to the *Yu zhu jingang bore jing xuan yan*.

We know from Yitian's 義天 *Xin bian zhu zong jiao zang zong lu* 新編諸宗教藏總錄 that a synoptic text called *Yu zhu jingang bore jing xuan yan ke* 御註金剛般若經宣演科, in two scrolls, was composed by Quanming 詮明, a scholar-monk who lived under the Liao 遼 Dynasty. The text, however, has not been indentified so far. My investigation raises the possibility that the author of the above Dunhuang manuscript fragments might be no other than Quanming. These materials thus become very important sources not only for our understanding of the influence exerted by the *Yu zhu jingang bore jing xuan yan ke* and the *Jingang ying* on later Chinese Buddhism but also for the study of Quanming's work and thought.

*Research Fellow,  
Strategic Research Project for Private Universities  
Granted by the Ministry of Education of Japan*

*'Establishment of the Research Centre  
for East Asian Buddhist Manuscripts'  
International College  
for Postgraduate Buddhist Studies  
Ph.D.,  
International College  
for Postgraduate Buddhist Studies*